

応援、母ちゃん！

－子育てしながら働く母親たち－

11

たまむら ふみ

玉村 文

はじめに

－毎日のルーティン－

育休後、時短勤務で職場復帰し半年以上が経ちました。朝は5時台には起きて、朝ごはんの準備をして、洗濯機をまわします。子ども達が起きてきたら朝ごはんを食べさせ、洗面し着替え、体温計で計測、保育園の連絡帳を書き、保育園に持っていくカバンに荷物を詰め込んで、子どもを保育園に送ります。保育園から一旦自宅に戻り、晩ごはん用に炊飯器をセット、洗濯物を干したあと、駅に向かいます。最寄り駅から電車で通勤し16時過ぎまで仕事です。そこからはいったん自宅に帰り洗濯物を取り込んで、簡単に晩ごはんを用意し、保育園に子ども達を迎えに行きます。子ども達が帰る

と、早速晩ごはん。晩ごはんを食べさせながら、保育園からの大量の洗い物の処理や、取り込んだ洗濯物を片付けます。一緒に晩ごはんを食べるときもありますが、子ども達のごはんの時間か寝ている時間は、家事がはかどる時間でもあります。ワンオペのときは、その後にお風呂を入れて寝かしつけ、そのあと食器を片付け洗濯機をまわします。洗い物が多いので、洗濯は1日2回、朝と夜にしています。その後、子ども達がすり寄ってくる布団でさっさと就寝。また次の日に備えます。

こんな毎日を過ごしていると、毎日があっという間に終わっていく感覚があります。夫が在宅ワークだと、保育園の送りに行けたり、お風呂を入れてくれたり、晩御飯の後片付けや洗濯を引き受けてくれるので、子ども達を寝かしつけたあとお菓子を食べながらTVを見る時間が作れたりします。と

はいえ、自分の趣味や習い事の再開は、もう少し先のことになるかもしれないと思っています。でも、そんなに時間がなくても幸せな日々でもあると感じています。

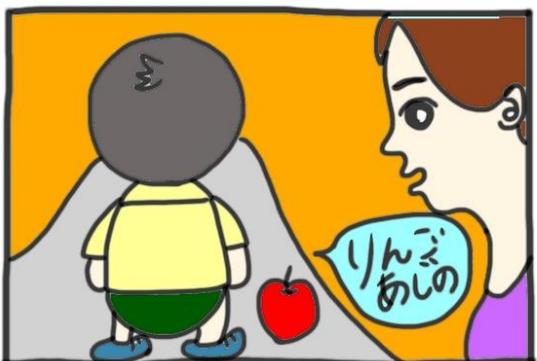
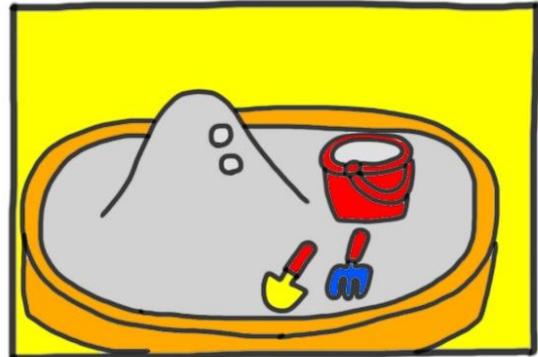
1. 付き添い入院、再び

仕事をするなかで、子どもの病気は困難をもたらすことがあります。特に、コロナ禍では、検査で陽性にならなくても待機時間があり、隔離しなければならない状況に陥ることも、子育て世帯では大きな問題だと聞いています。コロナに感染するかもしれないと恐ろしく感じるのは、なにも症状だけではなく、むしろその症状以上に、社会生活に支障を及ぼすことだと個人的には感じています。

幸いなことに今のところは家族みなコロナには感染せず過ごせています。とはいえ、ずっと病気をしていないかというとなんかとはなく、毎月1日以上は保育園を休んでいます。特に9月頭に1歳の娘が夏風邪をこじらせ肺炎になってしまい、2泊3日の入院を経験しました。入院するまでも一週間熱が出て、保育園はお休みで自宅療養していました。ですので、完全に回復するまで2週間ほどかかりました。その間仕事を休んでいたかというとはそうではなく、半休を取ってわたしと夫で交代したり、わたしの母に預けたり、毎日をやりくりしていました。

しかし入院となると、付き添いすることになるので、完全に仕事はおやすみ（特別休をもらいました）。入院前の検査でRCR

#予想外のヒトコト①



検査をし陰性でしたが、コロナの偽陰性の可能性もあるため、個室で2日間隔離されることになりました。もちろん病棟には付き添い入院する保護者しか入れず、差し入れや荷物などは看護師さんを介して渡してもらわねばならないという状況でした。

いったん入院になると自由に出入りすることはできないと覚悟をし、入院する前に自宅に帰って準備をしました。あまり時間はありませんでしたが、付き添い入院中しばらく入浴はできないため、お風呂に入りました。そして、2日3日分の着替えなどお泊まりセット、子どもが食べ慣れているベビーフードやふりかけ、海苔、ミルクと哺乳瓶、おもちゃなども必要なカバンに詰め込みました。持っていかずに不便に感じ、あとから差し入れてもらったものとしては、割り箸、子ども用の前開きのパジャマ（ロンパース）でした。点滴の管がついている腕を通すために、前開きのパジャマでないと着替えさせることが難しかったためです。

2. 子連れ出勤

子どもが病気のときに職場に連れていくわけではありません。

症状が落ち着いても様子を見るために保育園をお休みさせないといけない期間や、登園許可をもらうまでの間、少しでも仕事を休みたくない・休みにくい状況の場合、職場につれてきて過ごすことがあります。わたしは、9月頭に1歳の妹が発熱でしばらく保育園を休んでいたときに、3歳の兄

が登園しぶりがありました。妹と一緒に保育園に行くのならそんなことはなかったのに、妹だけおやすみで自分だけ登園ということが受け入れられなかったのだと思います。登園しぶりは次第にエスカレートし、泣き叫び、親から離れない状態になってきました。そこで思い切って病気ではなかったのですが、1日保育園をお休みさせ、職場に連れて行くことにしました。自宅では娘を安静にさせつつ、夫は在宅ワークをしていました。

子ども連れで職場に行くと、予想外にウェルカム。邪魔にせず受け入れてもらえました。「わたしも昔、父親の職場に連れて行かれたことがある」という声や、同僚から「子連れ勤務、常習犯です」という反応もあり、制度化されているわけではないのですが、柔軟に対応していることがわかりました。職場環境や上司の考え、組織風土に影響されることかもしれませんが、一つの選択肢としてあると思えたことで、少し肩の力が抜けた気持ちになりました。さて、連れて行った3歳の息子は、お絵描きさせてもらい、持参したお弁当を食べ、お昼寝をしながら帰宅しました。帰ったあとは「しごとしたなあ」と、自分も仕事をしたと満足げでした。「また仕事をしに行きたい」と言うほどで、子連れ出勤が「最後の選択肢」になり得ることがわかりました。そして、そう言うということは、働いているわたしをポジティブな眼差しで見ていることが分かります。最後の選択肢でありながら、働く姿を見せる意味を感じました。

子連れ出勤をしたという出来事を、別組織で子育てをしながら働いている方に話したところ、「そんな状況なら在宅ワークに切

り替えてもらえたら良かったのに」という反応がありました。別の同僚も、「子連れで職場に行っても仕事はできない」と子連れ勤務には否定的なリアクション。そのような反応を受けて、子どもを職場に連れて行ってまで仕事をしなければならないのは時代遅れで、在宅ワークに切り替えるような働き方が市民権を得たのだなと感じました。ハイブリットな働き方はこれから当たり前になってくるのでしょうし、働き方を選ぶことは子育て世帯にとって重要性が高いでしょう。一方で、子どもに働いている姿をどのように見てもらえるかは大事なテーマだとも思います。家とは違った仕事の顔で、他者のために動いている母親を見せられる、子連れ出勤は一つの有効な実践だったと思います。

ら、いまのわたしにとって自分に正直でいられる、子育てと仕事の両立は良いことも大変なことも両面あると認めながら発信することを大事にしたいと思います。

3. まとめ

子育てしながら働く母親というと、とても大変で不安を伴うものというエモーションを引き起こす現代だと思います。また、子育てしながら働けるように調整したり、転職したりという制度やテクニカルな情報が溢れています。一方で、少しずつではありますが、パパの育休経験がその後の仕事に有益だという経験が発信されたり、子育てスキルが仕事に応用できるなど職場で共有することができるようになってきました。わたしはそのどちらの側面にも当事者として共感できます。どちらかに偏って主張する方がわかりやすく意見が通りやすいように思います。政治家のように。しかしなが